様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１５９１３

研究課題名（和文）地域における発達障害児とその家族に対する新たな養育支援方法修得プログラムの開発

研究課題名（英文）Developing alternative parenting program for supporting children with developmental disorders

研究代表者
芳我　ちより（HAGA, Chiyori）

岡山大学・保健学研究科・准教授

研究者番号：３０４３２１５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，発達障害児の早期発見・早期療育のための支援方法を修得する教育プログラムの開発を目的とした。その結果、①育児支援としての発達障碍児支援の在り方について保健師は障害を疑う児へのアプローチ以前に、保護者との関係構築のための育児支援方法の更新、②早期療育として有効と思われる音楽療法についての更なる検証、③療育評価方法の開発、以上3点が課題である。
臨床の場において個別の事例対応に追われることなく、育児支援としての共通性にも目を向け、システムづくり、個別援助の技法の向上を整理し、開発していくことが、次のステップとして重要だろう。今後、これらの課題への対応が求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
発達障害者はコミュニケーション上の問題を有することが多く、第三次産業中心の社会においては、その障害の特性により社会に適応することが困難となることが多く、最悪の場合引きこもり等の問題を生じることから、それら二次的な障害予防への関心が高まって久しい。早期発見・療育が重要であるとしながらも、日本における乳幼児健診がその契機となるためには、多くの課題があるが、本研究は保健師に向けた親支援のための研修の必要性、早期療育方法として音楽療法の有効性を示唆した。また、発達障害の程度を測定する尺度開発が重要であり、今後、これらの方法を介入として、介入効果を図るという研究課題を示したことが本研究の成果である。

研究成果の概要（英文）：This study project aimed to develop alternative and innovative program for training to improve educational and treatment skills of public health nurses for children with developmental disorder. As a result, we found that some suggestions including 3 points, which were as follows; 1. The needs for supporting and educational skills for establishing a relationship between parent and the nurses, 2. More investigation for improving and confirming the treatment skill of music therapy which may be best method as treatment for preschool children, 3. The need for development of method for evaluating efficacy of the treatment. In the future, these issues should be solved by interdisciplinaryresearchers.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：発達障害　未就学児　療育　評価　支援プログラム

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2005 年 4 月に発達障害者支援法が施行され，各都道府県および市町村は発達障害を早期に発見し，発達支援を行うこととなった。2012 年の文科省調査は，発達障害の可能性のある子どもが 6.5%に上ることを示した。概念の普及，早期発見の徹底により，現在，市町村での幼児健診において保健師たちは発達障害をスクリーニングし専門の養育機関へと繋げているが，その数は増加しており，専門機関による療育までに時間を要している。これらのことより，早期発見のみでなく早期に対応できる効果的な養育支援方法の開発が急がれる状況にあった。

当時の市町村における発達障害の親子に対する支援事業の主たる内容は，発達障害をもつ，あるいはその疑いのある子どもと親を対象に開催される育児教室であり，主体的な参加が原則となるものであった。当然，中には子どもの障害を否定したいが故に，このような教室に参加できず療育のチャンスを先延ばしにする養育者や，問題そのものを認知できず支援を受けられない養育者もいることが推測された。その一方、療育支援を希望しても，専門機関での受療は半年から 1 年待ちという状況があり，日々の養育に困難を感じ，不幸にも虐待へと繋がるケースも出現している状況であった。

そこで，支援のポイントを 2 点に絞った。一つは，子どもの発達上のつまずきを障害として認められない養育者に対する支援（支援①）と，専門機関での療育を受けるまでの養育者に対する支援（支援②）である。これらの２つの支援方法について、保健師の技術向上のための研修プログラムを開発する必要性があった。

２．研究の目的

本研究は，発達障害児を早期に発見した後の早期療育のための支援方法を修得する教育プログラムの開発を目的とした。そのプログラムとは，これまで養育者と支援者がともに学び育ちあうことを理念にもち，その療育効果が認められている「TEACCH プログラム」の療育エッセンスを活用し，先進国である米国等の支援方法を取り入れた，国際標準のプログラム開発をめざすことを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、3 か年に渡り、以下のようなスケジュールにて実施することとした。

１）看護職による発達障害児支援の実態調査：

（１）岡山県内の市町村保健センターに対し，発達障害児およびその家族に対する支援の実態調査を行い，現状を把握するとともに，課題を検討した。

（２）調査時に，実際に発達障害児およびその家族を支援する際に困っていること，研修として受けたいと考えていることをアンケートした。

２）看護職向け教育プログラムの開発，評価方法の検討：

（１）１）-（１）において実施した実態調査をもとに，現状での支援体制および支援の課題を検討するとともに，本研究への協力希望のあった看護職へ実施した研修会において、アンケート調査を行い，看護職にとって不足している能力および修得の必要な能力を明確にした。

（２）療育の方法、評価方法について協議した

３）プログラムの試行と改訂：

（１）保健師対象に 3 自治体で試行（岡山市，県内・近県で応募のあった自治体）

（２）助産師対象に 3 施設で試行（岡山大学附属病院と，県内・近県で応募のあった産院等）

（３）教育評価（アウトカム・プロセス・企画評価）

（４）プログラム総括的評価とそれに基づく改訂

４）システマティックレビューによる療育方法の在り方と評価方法の検討：

（１）発達障害とくに自閉症をもつ、就学前の子どもに対する臨床比較試験の結果をメタアナリシスにより分析し、どのような方法で療育すべきか、また、どのように評価すべきかを検討した。

（２）システマティックレビューによる知見をもとに研修プログラムに含めるべき内容を検討

５）成果発表（学会発表，論文投稿），普及へ(書籍，ホームページ開設，講演等）

（１）国際疫学会、日本公衆衛生看護学会等にて発表

（２）関連の英文誌に 2 本投稿，国内雑誌に総説と資料を投稿。精錬のための関連研究会での発表と協議

（３）岡山大学出版又は関連出版社に交渉，プログラム実施の手引き書をパンフレットにまとめ，希望自治体には無料配布する。また，専門家向けに書籍化し，支援方法の普及を目指す。

（４）ホームページの開設，研究成果を随時公開

（５）公表･普及のための市民公開の講演会，専門職向け指導者育成研修会，等を実施。

４．研究成果

本研究の成果は、①育児支援としての発達障碍児支援の在り方について、②早期療育の方法論確立の必要性について、③療育評価方法開発の必要性について、以上 3 点について示唆を得たことである。まず、①について、保健師は障害を疑う児へのアプローチ以前に、保護者との関係構築に苦慮しており、発達障害児支援以前に、従来の育児支援の方法論も更新していく必要が示唆された。②について、就学前の子どもたちへの療育方法には、多様な手法が試行されている段階にあり、未だ、その評価研究

は十分には無く、現時点では音楽療法を取り入れることが最良の方法と推測されることが明らかになった。③について、何をもって療育の効果を評価するかは試行錯誤の段階にあり、乳幼児の多様な機能をどのように評価するかは統一した見解が存在せず、今後、その開発が望まれることが明らかになった。

臨床の場では、個別の事例対応に追われ、その個別性（差異）に焦点が当てられているが、共通性にも目を向け、システムとして整理すべきものと、個別援助の技法として明示・向上させるものを整理していくことが、次のステップとして重要だろう。今後、これらの課題への対応が求められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① Chiyori Haga, Su Su Maw, Toshiaki Suwa, Nobuko Ohi and Shizuko Tanigaki：Supporting Children with Developmental Disorders: Difficulties and Future Strategiesas Perceived by Japanese Public Health Nurses, COJ Nursing & Healthcare, 査読有，2, 1-3, 2018. DOI; 10.31031/COJNH.2018.02.000536,

② Su Su Maw, and Chiyori Haga：Effectiveness of cognitive, developmental, and behavioural interventions for Autism Spectrum Disorder in preschool-aged children: A systematic review and meta-analysis"jointly worked", Heliyon, 査読有，4, 1-20, 2018. DOI; 10.1016/j.heliyon.2018.e00763

③ 芳我 ちより，諏訪 利明，大井 伸子，谷垣 静子，河本 茂美：岡山県内の市町村保健センターにおける発達障害児対策の実態，保健師ジャーナル,査読有，　72，396-403，2016．

〔学会発表〕（計　3 件）

① 芳我ちより：発達障害児支援における市町村保健師の困難と技術向上のための方策、第 37 回日本看護科学学会学術集会，仙台国際会議場, 2017 年 12 月

② Su Su Maw and Chiyori Haga：Intervention strategies for preschool children with autism spectrum disorder : a systematic review and meta-analysis of published articles between years 2001 and 2015, The 21st International Epidemiological Association (IEA) World Congress of Epidemiology, ソニックシティ大宮，2017 年 8 月

③ Chiyori Haga：Child care providers' perceptions of children's lifestyles and risk factors for obesity : A focus group study：2nd Annual Congress and Medicare Expo on Primary Care, Phoenix Airport Marriott, 2016 年 9 月

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
岡山大学大学院保健学研究科芳我研究室
http://www.okayama-u.ac.jp/user/childhealth/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：諏訪 利明
ローマ字氏名：SUWA Toshiaki
所属研究機関名：川崎医療福祉大学
部局名：医療福祉学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70633840

研究分担者氏名：大井 伸子
ローマ字氏名：OHI Nobuko
所属研究機関名：岡山大学
部局名：保健学研究科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：60155041

研究分担者氏名：谷垣 靜子
ローマ字氏名：TANIGAKI Shizuko
所属研究機関名：岡山大学
部局名：保健学研究科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80263143

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。